

故 大野乾先生を偲んで

徳永 勝士

東京大学大学院医学系研究科, 人類遺伝学分野

米国シティ・オブ・ホープ研究所の終身特別研究員で、日本組織適合性学会の特別名誉会員でもある大野乾先生は、去る平成12年1月13日肺がんのため、御逝去されました。享年71才でした。

先生は1949年東京農工大学を卒業され、1953年には米国へ渡り、シティ・オブ・ホープ研究所で研究を開始、生物学研究部部長を経て、1981年に米国科学アカデミー会員に選ばれました。先生は、あらためて記すまでもなく、遺伝子重複による進化、ほ乳類におけるX染色体の不活性化や進化的保存性をはじめ、数々の独創的な理論を打ち立てました。生物進化の研究における3つの金字塔をあげるなら、ダーウィンの「進化論」、木村資生の「中立説」、そして大野乾の「遺伝子重複による進化」ではないでしょうか。遺伝子DNA配列の進化からアミノ酸配列・たんぱく質の進化、そして生物の大進化についても、「重複」「模倣」をキーワードに大胆かつ魅力的な仮説を提唱されていることは、近年の御著書にも現れています。栄えある第1回デンマーク王立アカデミー基礎科学賞を受賞されたのは、私達の記憶にも新しいことです。今回、身のほど知らずにも大野先生の追悼文を仰せつかりましたが、型通りに先生の素晴らしい御業績を振り返るのではなく、むしろ私の大野先生についての思い出の一端を記して追悼文とさせていただきます。

大野先生の不朽の名著、*Evolution by Gene Duplication* は1970年に出版されたものですが、その日本語訳はかなり遅れて、1977年に出版されました。私は当時、この翻訳本を読んで、その発想の斬新さとスケールの大きさに大変感激したのですが、一方、その著者の名前が「S. オオノ」と記さ

れていたものですから、どうやら日本人のようだが、いったいどんな人なのだろうかという好奇心も募っていたわけです。

大野先生に初めてお会いする機会を得たのが1980年でした。当時、若手研究者やその卵向けに、「遺伝学セミナー」が医学研究振興財団によって開かれていました。当時としては珍しい企画で、聴講生と第一線の講師（海外からも3、4人）が3泊4日の泊まり込みで、朝から夕方までは講演と質疑応答で缶詰状態となり、夜は講師の誰かの部屋に押し掛けて、お酒を飲みながら議論に花を咲かせる、実に刺激的で楽しい会でした。このセミナーに、大野先生が講師のひとりとして来られました。私は当時、大学院博士課程に入ったばかりでしたが、10人位で毎晩大野先生のお部屋にお邪魔して、それぞれが日頃から疑問に思っていることをいろいろとお聞きしたことを覚えています。今でも鮮烈な記憶として残っていることは、先生は何でも御存知で誰からの質問にも必ずありきたりではない答が返ってくるという印象でした。また同時に、先生がとても穏やかな優しい表情で、お酒やパイプを片手に、私達若造の未熟な質問に丁寧に答えて下さった、その温かい人間性にも魅了されました。

それ以来、私は先生の御講演を聞かせていただいたり、直接お話を伺える機会に恵まれてきた人間のひとりだと思います。私が東京大学医学部人類遺伝学教室に移った後も、御講演いただいたり、図々しくも、私達の教室員の研究発表を聞いていただいたりしました。先生が一人一人の発表を丁寧に聞いていただいて、コメントを下されたのは私達教室員にとってもかけがえのない経験でした。

学会の方々も、2年前に猪子英俊先生が主催された大会での先生の御講演に感銘し、また昨年佐治博夫先生が主催された大会での「大野 乾」シンポジウムを大いに期待したと思いますが、御自身の出席はかなわぬままのシンポジウムとなりました。すでにその時、先生は病魔と闘っておられ、本年始めついに不帰の人となりました。

もっと長生きして、示唆に富む御考察の数々と、お酒を飲みながら、あの温かなユーモアにあふれた会話を皆に与え続けていただけたらと残念でありますが、今はただ安らかな御冥福を心からお祈り申し上げます。



東京大学理学部での大野先生の御講演後、当時（1981年頃）の人類学教室遺伝研究室（尾本恵市教授）のメンバーが大野先生を囲んで談話した。左列手前より、大野乾先生、斎藤成也（現 国立遺伝学研究所助教授）。右列手前より、宝来聡助手（現 総合研究大学院大学教授）、植田信太郎（現 東京大学理学系助教授）、徳永勝士、西垣敏紀。